

ンジーでは、モデルの上や一部に往復線を重ねて覆うように塗りつぶすという14~19ヶ月齢のヒトに多く現れた行動と似た反応が見られたほか、モデルの線をなぞるという、手首の動きの調整をともなう行動がみられた。しかし模倣して、同じ形を空白部分に描くことはなかった。これらの成果について、第8回SAGAシンポジウム(大阪, 11月)、および日本発達心理学会第17回大会(福岡, 3月)でポスター発表した。

3-9 物体ベースの注意の側面からみた視覚認知の霊長類的起源

牛谷智一(千葉大・文)

対応者: 友永雅己

ヒトでは、純粋に距離の関数で記述されるような空間的注意のほかに、オブジェクトを賦活の単位とするような物体ベースの注意過程があることが知られている。Egley et al. (1994) に類似したパラダイム下で、チンパンジーにおいても物体ベースの注意がみられるか調べた。予備実験では、探索することが求められたターゲットに先行して呈示された手がかりが、ターゲットの出現位置を高く予測する場合、ターゲットへの反応時間が短くなることを確認した。実験1では、2つの長方形をオブジェクトとし、平行に並べて、ターゲットが先行手がかりと同じオブジェクト内に出現する場合、遡るオブジェクトに出現する場合に比べて反応時間が短くなるかどうか調べた。しかし、スタートキーからの距離の効果が大きいのか、全ての被験体からは明確な結果が得られなかった。実験2では、できるだけターゲットの出現位置がスタートキーから等距離になるようにするため、長方形を水平に配置した。チンパンジーの反応時間は、チンパンジーでもオブジェクトベースの注意過程が存在することを示唆していた。

3-10 チンパンジー母子間における「葛藤」にかんする縦断的研究

水野友有(中部学院大・人間福祉)

対応者: 松沢哲郎

本研究は、チンパンジーにおいて母子間の身体的・心理的距離が多様に変化していく過程を行動学的観察によって明らかにすることを目的とし、特に、授乳場面でみられる母子間のコミュニケーション行動に着目した。チンパンジーの母子間の相互作用は、必ずしも緊密な愛着を示すものだけではない。逆に、4・5歳頃の離乳期を迎えるチンパンジーは、子どもを自立させようとする母親と、母親の庇護をあくまでも求め

ようとする子どもとの間に著しい葛藤関係をも生み出している。本研究では、生後1歳から4歳まで蓄積したビデオ記録について授乳場面を抽出し、①授乳開始の合図、②母子接触の開始と終了時間、③授乳回数、④授乳開始と終了時間、⑤授乳終了の合図、⑥授乳状況、⑦アイコンタクトの有無について分析した。その結果、発達に伴う授乳頻度および授乳時間の減少がみられ、また、生後2年頃からは授乳頻度と母親の生理周期との関係性が示唆された。

4-1 テナガザル類のY染色体解析用分子マーカーの作製

田口尚弘(高知大・院・黒潮圏海洋科学)

対応者: 平井啓久

昨年に引き続き、染色体顕微切断法を使って、テナガザルの微小Y染色体を標的としたプローブの作製、およびクローニングを施行した。テナガザルY染色体から顕微切断で得られたDNA断片をPCRで増幅し、さらにプローブ化したPCR産物をFISH法で確認すると、テナガザルの微小Y染色体全体に分子雑種形成したので、プローブ作製の成功を確認できた。このプローブを使って、TAクローニングを行い、現在、50以上のクローンを得ている。さらに、これらクローンのシーケンスは現在進行中であるが、今のところ解析したクローンは繰り返し配列がほとんどであった。そこで、ユニークな配列を持つクローンを得るために、サブトラクション法を行なっている。この方法は市販されているヒトCot-1DNAを利用する。まず、ヒトCot-1DNAを化学的にビオチンラベルする(Chemlink)。次に、これを顕微切断で得られたPCR産物とハイブリダイズした後、アビジンを付加したビーズを利用して、繰り返し配列を除く方法である。この方法で、ユニークなシーケンスを分離し、データベースを構築して行く。現在、この方法を使って解析を進めている。

4-2 テナガザル類の音認知と発声制御についての実験的研究

小田亮(名古屋工業大・工学)、松本晶子(沖縄大・人文)

対応者: 正高信男

テナガザルのソングはノートと呼ばれる個々の発声を組み合わされて構成されている。本研究では、3種類の異なるノート間隔をもったソングを作成し、これらをテナガザルに対して再生した。再生中と再生後の行動をビデオに記録し比較することで、テンポの認